

医療機関での現病歴の自己申告状況について

中丸 恵太¹⁾、三田寺 美穂²⁾、畔柳 裕一³⁾、西澤 満里子³⁾、前田 守⁴⁾、
長谷川 佳孝⁴⁾、月岡 良太⁴⁾、森澤 あずさ⁴⁾、大石 美也⁴⁾

- 1) 株式会社アインファーマシーズ エール薬局 九段店
- 2) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 大手町店
- 3) 株式会社アインファーマシーズ
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】疾患によっては服用禁忌の医薬品があるため、安全な薬物治療の実現にはすべての医療関係者が患者の現病歴を把握する必要がある。そこで、患者の医療機関への現病歴申告状況を調査し、安全な薬物治療の実現に向けて保険薬剤師が果たすべき役割を考察した。

【方法】2018年1月25日から3月15日に関東地方の当社薬局4店舗に来局した患者100名にアンケート調査した。主な調査項目は、現病歴の有無と種類、医療従事者への伝達方法(複数回答可)、伝達相手、お薬手帳の利用と「わたしの情報」欄への記載の有無とした。

【結果】対象患者の33名に現病歴があり、高血圧(60.6%)、高尿酸血症(21.2%)、狭心症(15.2%)の順に多かった。現病歴がある患者の97%(32名)が医療機関受診時に現病歴を伝えており、伝達方法はお薬手帳(54.4%)、口頭(51.5%)の順に高かった。伝達相手は医師が最も多く(69.7%)、保険薬剤師は36.4%であった。お薬手帳を医療機関への提出率は、現病歴ありの患者が74.2%、現病歴なしの患者が41.7%であった。現病歴ありの患者の25.8%しか「わたしの情報」欄へ記載していなかった。

【考察】現病歴がある患者の多くが医療機関に申告していたが、主な申告対象は医師であり、保険薬剤師への申告率は高くなかった。お薬手帳は現病歴の申告に使用されていたが、「わたしの情報」欄に記載されるケースは少なかった。以上から、主に疾患への処置を行う医師への現病歴の申告はお薬手帳や口頭で良好に実施されているが、薬物治療の管理が主となる保険薬剤師には現病歴の申告の必要性を感じない患者が多く、保険薬剤師の情報源であるお薬手帳の「わたしの情報」欄の記載が乏しくなることが考えられた。したがって、保険薬剤師がかかりつけ機能を発揮して地域医療に貢献するためにも、お薬手帳の医療機関への持参を促すとともに、「わたしの情報」欄の重要性を啓発し、その記載の充実化を図ることが重要である。

(第12回日本薬局学会学術総会(2018年11月, 名古屋)にて発表)